

心から自分に感謝！

エンヤの音楽は、イマジネイティヴで、聞き手にさまざまな映像を運ぶ力を持っている。ある映画監督は、「エンヤの音楽には宇宙が存在している」と表現したことがあるが、たしかに普段音楽から受ける感動や感情だけではなく、細胞を活性化させ、人を癒し、リセットさせるような特別な力が宿っている。

エンヤの歌声を聴きながら、春の空を見上げると、いじめで子どもたちが命を絶っていくことや、子どもが親や友だちを殺すような信じられないできごとが脳裏をよぎる。

なぜ、人を容易に殺してしまうのだろうか。それは人間が自分の利益のため、容易に木を伐採してしまうなど、他の生命を容易に駆逐していることと関係あるように感じる。

人間は肺や心臓を持っていたとしても、酸素がなければ生きていけない。私たち人間は大気中の酸素を取り入れてエネルギーを取り出し、二酸化炭素にして吐き出す。ところが植物はそれとはや逆に、二酸化炭素を取り入れ、光合成をして、酸素を放出してくれている。なんとうまい具合に補完していることだろうか。これだけをとっても私たちは生きているのではなく、生かされているということがわかる。

地球の大気中の酸素は、もう何億年もの間、常時21%に保たれていて、この酸素が、もし空気中に25%あったとしたら、雷が落ちただけで火事になってしまう。反対に21%以下だったら、私たちは息苦しくて生きておれない。しかもこの酸素は地球だけにしかなく、火星、金星の大気中の酸素濃度は、何%しかなく、生命体は生きていけない。酸素一つをとっても、私たちは絶妙なバランスで生かされている。

生かされているという事実に目覚めると、謙虚な生き方をしなければならないと自覚させられ、人間だけの独りよがりの生き方は許されないことがわかってくる。

子どもが親や友だちを殺すような信じられない事件は、人間が共感しなくなっているからだ。自分は生かされているという感覚が欠如しているため、他者に共感できないのだろう。自分が悲しい思いをすれば、他の人の悲しみを理解することができるはずだ。そう考えると、痛みも悲しみも、成熟した人間になるためにはとても必要なものだということがわかる。

現代人は悲しみや、痛み、苦痛を嫌うが、それらは次の至福を得るための通過点ではないだろうか。罪や災難として起こるのではなく、もっと積極的で、建設的な意味があるように思える。そう理解すると、いかなる事態におちいろうとも、自分を見失わず、建設的に受け止めることができるようになる。

宇宙は百億くらいあり、その百億の宇宙の一つがわが地球の属する銀河系宇宙である。銀河系宇宙の大きさはほぼ分かっていて、楕円形で光の速度で直径が十万年、厚さが一番厚いところで一万五千年かかる距離だといわれている。あまりのスケールに言葉もない。

その宇宙の中で地球だけに生命が宿されている。宇宙から見た地球は、ものすごく美しいと宇宙飛行士たちは口をそろえる。地球に住む生命体が発するオーラが地球を美しく輝かせ

ているに違いない。

その地球に住む生命体に宇宙は天敵を与えた。天敵がなければあらゆる生命は増長し、まん延する。しかし限りない生命体の中で人間にだけ天敵がない。なぜか。長い間の疑問だった。人間の天敵は外ではなく、心の中にいることに気づかされた。

人間を襲い、むしばむ天敵。それは心の中の中の不平不満。事あるごとに湧き起ってくる不平、不満、愚痴こそ、人間を滅ぼす天敵である。

しかし、人間を損なう天敵の対極になるもの、それは感謝。心が感謝の思いに満ちあふれた時、あらゆる不平不満は一気に消え去る。感謝こそ人間という生命体を健やかに成長させる根幹である。

私たちはすでに奇跡のような生命をいただいて生きている。「生きて」いるのではなく、限りなく恩の中に「生かされて」いるという世界、「おかげさま」で、「ありがたい」という味わいを、理屈なしに感じていけるようにしていきたいものである。

「僕は断言したいんですけどね。幸せのほうがずっと多いんですね。ただ、たくさんの幸せの中にある、ほんのちょっとの不幸が、全てを不幸に思わせてしまう。そういう感情を人間は持っているので、心の中の、心の使い方、というのは自分自身に責任がある。それをしっかり持って、このいっぱいある幸せを満喫しなければならない、と思うんですね。何度想ってもそう思います」(木版画家 名嘉 睦稔 (なか・ぼくねん))

私は、自分がからだを持ってこの世に生きていることを心から喜びたい。その喜びが、言葉を超えて、からだから直接伝わってくる。自分の生命は、自分の所有物でなく、太古から連綿と受け継がれてきた大きな生命の一部分であることを、頭でなく、からだで感じ取りたい。心から自分に感謝！